『無者キリスト』を読む（新宿集会にて）

一粒の麦

――第二部 第六相「棄身・棄石」――

２０２５年1月26日
弘野慶次郎

空の空すべて空なり　人の子が栄光を受くべき期　新事実の到来　栄光を受くべきとき　「一粒の麦」　まことの神にしてまことの人　十字架から再臨の栄光　我々一人一人のこと

●空の空すべて空なり

皆さん、お早うございます。

私がここに来るということは、私にとっては喜びでもありますし、もともと神さまに妻の淑子にも信仰を与えてもらっていますので、こういう機会に一緒に来るということは、非常に私にとってはありがたい。神さまにとっても讃美のことだと思っている。できるだけ、私も皆さんと一緒に讃美したりしたいと思いますので、機会がある限り、皆さまとご一緒に主を讃えたいと思っております。今回まもた、その主を一緒に讃えたいという思いだけで私は来ております。今年から一年間、またよろしくお願いいたします。

今、召団讃美歌Ａ20「信じ入れば」（1980.11.27作詞）を歌いましたけれども、小池先生の讃美歌は相変わらず勇ましいというか、力強いですね。

「信じ入れば……
　新天地の望みに生く」

と書いてくれています。本当に新しい世界が来たということで、その望みの中に生きていくという、今日はそういうこともちょっとお話したいと思っております。

「伝道の書」から少し話をしようと思います。これは、

「空（くう）の空、空の空なる哉、すべて空なり」（伝道1・1）

から始まっていて、すごく無常な感じを受ける。ところが、これは無常観だけではない。やはり神を讃美しているんです、ずっと読んでいくと。12章の所に伝道の書の結論として、

「13**すべてに耳を傾けて得た結論。「神を畏れ、その戒めを守れ。」これこそ人間のすべて。**」（伝道12・13）

と書いてあったり、

「1**青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。苦しみの日々が来ないうちに。「年を重ねることに喜びはない」と言う年齢にならないうちに。**」（伝道12・1）

と書いてある。

「年を重ねることに喜びや楽しみを見出さなくなる前に」

と書いてある。もう今の世の中、全世界はそうですけれども、若い人が本当に福音をどんなふうして知るか、それが段々できなくなったような時代になってきているのではないかなと思う。

「苦しみの日々が来ないうちに、年をとってもう何の楽しみもない、もう死ぬばっかりだとか言う前に、主を覚えよ」

と書いてある。だんだん年寄りになってくるでしょ。その時になって希望がない。もう年取って主を知らなかったら、本当に希望がないわけです。だから、若い時に主を覚えて、創造の主を覚えて、年をとっても赫々（かっかく）たる希望に生きていくということが、全然だんだん無くなっていくのではないかと、ひしひしと思いました。伝道の書にそういうことが書いてあるということを、私は若い時に読んだけれども、忘れていました。

「若い時に主を覚えよ」

と。これは若い人にもやはり知ってもらわないといけないと思う。そして、

「年を重ねても何も喜びも楽しみもない」

というふうになる前に主を覚えることです。

我々は本当に主に知られているから、物凄く幸いな存在なんですよ、本当に幸いな存在です。さきほどの讃美歌に、

「新天新地の新しい時代に我々は生きていく」

と歌詞にありますように、本当にこれは讃美あるのみの世界、次元だと私は思う。

伝道の書の最後には、「審判」のことも書いてある。12章14節に、

「14**神は善をも悪をも一切の業（わざ）を、隠れたこともすべて裁きの座に引き出されるであろう。**」（**伝道12・14**）

と、最後にそういうことが書いてある。伝道の書というのは無常の書かと思ったら、「最後の審判」のことまで預言されている。我々は復活したあとで、善きも悪しきも神の座、審判の座に引き出されるだろうと思いますけれども、主に在っては、キリストに在っては、そういうことは一切ありませんので、我々は心配することは何もないけれども。この神の歴史の中の最後の審判まで、伝道の書の中に預言されていることを私は改めて知ってびっくりしました。また、この中に美しい言葉に出会った。

「11**神のなされることは皆その時にかなって美しい**」（**伝道3・11 口語訳**）

と。神のなされることはみなその時に美しい。そうですよ。自分の人生をずっと見てみても、本当に神のなさることはその時にかなって美しい。過去をふり返ってみたら、

「あっ、あの時に神さまは自分に手をさしのべておられたのだな。あの時に私は怪我をしたけれども、その時に最も神さまと近しくなることができたのだな」

と思って、

「**神のなさることはみな、その時にかなって美しい**」

ということを改めて私はこの伝道の書から今回学んで、

「あっこんな美しい言葉があるんだ」

ということも感じました。

●人の子が栄光を受くべき期

今日は『無者キリスト』の「一粒の麦」（259頁）の所を学びたいと思います。

《　**一粒の麦**（ヨハネ12・20～28）

人の子が栄光を受くべき期（とき）

過越の祭で礼拝をしようと思って、ユダヤ教に改宗したギリシア人が数人、ガリラヤのベッサイダ出身のピリポのところに来て、

「君よ、イエスにお目にかかりたいのですが」

と言って頼んだ。ピリポはアンデレのところに行ってそのことを話し、アンデレとピリポは、イエスのもとに行って伝えた。

するとイエスは答えてこう言った。

「**人の子が栄光を受けるときが来た。よくよく君たちに言っておく、一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかしもし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。自分の生命（プシュヘー）を愛する者はそれを失い、この世で自分の生命を憎む者は、それを保って永遠の生命（ゾーエー）に到る。もし私に仕えようとする人があるなら、その人は私に従って来るがよい。そうすれば、私の居るところに、私に仕える者もまた居るよ。もし私に仕えようとする人があるなら、その人を父は重んじてくださる。**

今、私は心が騒いでいる。私はなんと言おうか。父よ、この時から私をお救いください。しかし、このために、この時に至ったのです。父よ、み名の栄光をあらわしてください」（ヨハネ12・23～28）

異邦人が数名やって来て、イエスに会いたいとねがったことはふしぎである。いよいよ異邦人に福音が伝えられるさきがけとなったといえよう。イエスはしかし十字架の死が近いことを予見していた。しかし十字架の死の突破をするとその先に復活、昇天、聖霊降臨、最後の審判、そして再臨の栄光が待っている。そのことをこそ希望している（ヨハネ12・28下～36）。それでギリシア人たちに答えるが如く、告白するが如くに語り出でた。それが右に引用したイエスの言葉であった。「人の子の栄光を受くべき時！」、何たる新事実の到来であろう。有史以来の新しき啓示の出来ごとである。復活、昇天、再臨の栄光の前に受くべきバプテスマがあった。それは十字架であった。直接

天界へ変貌して昇って往ってよいイエスである。正に文字通りの大往生、天界に往って生きるべきイエスである。しかるに十字架にかからざるを得ないとは。彼の十字架が贖罪の死であるがためである。自分のためではなく、人のため、我々一人一人のための死である。イエスは地上では全く一個の人間であった。それはパウロがいっている通り、「聖子（みこ）は罪の肉のさまで罪のために遣わされた」からである（ロマ8・3参照）。これが受肉のキリストの相対的現実である。

だから、

「今、私は心が騒いでいる。私はなんと言おうか。この時から私をお救いください」

と卒直に人たるの現実からの言を吐いた。けれどもイエスはそのあとで

「しかし、このために、この時に至ったのです。父よ、み名の栄光をあらわしてください」

と祈った。この偉大なる「しかし」で人間の現実を突破して、「このため」即ち十字架の贖罪死のため、「この時」すなわち、いよいよ地上の生涯を終る時、独一の使命を果すべき時を迎えたのである。父の聖意を体現してこそはじめて「父の聖名の栄光があらわれる」わけであるので、このように祈った。神性の権化キリストが、同時に人間イエスである受肉の事態であるから、キリスト・イエスと表現する。神性のキリストと人間性のイエスとがふしぎな一体をなしている。相対的存在（人間）でありながら、同時に絶対的存在（神）である。地上において、キリストは質的存在として神の子であり、使命的存在として神の僕であった。イエスはしかし祈るとき「父よ！」といって祈っていたから、質的存在としての神の子の自覚が根底であった。実存としてはどこまでも使命的存在として自らを実証していた。罪をゆるし、人を救うという事態は神の子の使命的存在においてのことである。しかし使命的存在の奥には神の子たるの質的存在があることは当然である。しかもそれが相対的存在としての人間に内在しているという構造である。これがいわゆる vere Deus vere homo（まことの神にしてまことの人）たる所以である。》

まず見出しに「人の子が栄光を受くべき期（とき）」とあります。この「とき」ということを考えてみたい。261頁の1行目に、

《「人の子の栄光を受くべき時！」、何たる新事実の到来であろう。》

と書いてある。「何たる新事実の到来であろう」というのは、「全く新しい」という、

「全く次元が異なっている新しい時代が来た」

という意味なんです。さっき歌った讃美歌（A20「信じ入れば」）に、

「新天地の望みに生く」

とあります。小池辰雄は新しい時代、新しい天地が始まったということを、歌っていると

読み過ごしてしまうけれども、

「全く新しい新事実が到来した、その時が正に来たんですよ」

ということを小池はこの『無者キリスト』で書いている。この讃美歌も、

「新天新地が、全く新しい新事実の時代が来たんだよ」

という思いが歌になっている。

「何たる新事実の到来であろう」

と、はっきりとここに書いてます。

●新事実の到来

《「人の子の栄光を受くべき時！」、何たる新事実の到来であろう。有史以来の新しき啓示の出来ごとである。》

と、小池辰雄は感動して書いてます。この新事実の到来というのは、有史以来、本当に新しい啓示の時が始まったということです。人類が関与した、神さまの歴史の流れの中でも、本当に新事実です。イエス・キリストが来られて、全く新しい時代に変化したということなんです。

「有史以来の新しき啓示」

と書いてます。本当に有史以来の出来事です。

「たった一回きりの全く新しい次元の異なる時代が来たんですよ」

ということを、

《何たる新事実の到来であろう。有史以来の新しき啓示の出来ごとである。》

と言う。だから、「人の子の栄光を受くべき時」の「時」というのは物凄く重大な時です。全く新しい時代が到来したというその時なんです。

「全く新しい時代が来た」

ということをパウロがはっきりと言っている。コリント人への第二の手紙の5章17節に、

「17**だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。**18**これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。**」

神さまと私たちは敵対しているわけです。旧約時代から今でもそうです。その敵対している神さまと和解させてくださった。そういう時代が到来した、

「キリストと結ばれている者は、キリストを信じている者は、全く新しく創造された」

と書いてある。全く新しい創造ですよ。旧い創造がありますね、我々は創造された旧い体質を持っているけれども、

「全く新しい時代がきて、我々が神さまと同質の新しい人間に変えられた」ということをここでパウロが言っている。

「キリストと結ばれている者は、キリストに在る者は、全く新しく創造された者です。古きは過ぎ去った」

と、この「時」をパウロは言う。パウロが生きた時代に、

「キリストの十字架の時を境にして、全く新しい時代がきた。新しくみな一人ひとりが新しい神の子として創造されている」

ということをここで言っている。

ガラテヤ書でも同じようなことを言っている。ガラテヤ書6章14節、

[14]しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。[15]割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです。」

ここは新創造のことを言っている。このガラテヤの人たちは古いユダヤ教を信じていて、

「やはり割礼をしなくてはいかん」

とか言うから、

「そんな問題とは違いますよ」

ということを言っている。人間の基準ではない。大切なのは、

「全く新しく創造されることが最も大切なんですよ」

と言っている。新しく、我々の性質が神と同質にされるという、新しい人間が生まれることをここで言っている。パウロは十字架の体験を通じて、

「我々一人ひとりが全く新しい人間に変えられたんですよ」

ということ言っている。それが

「新しく創造される」

ということ。それが全く新しい新事実だということです。

「古いものは過ぎ去った。本当にすべてが新しくなった」

というのは、一人ひとりが神さまと、イエスの十字架によって全く新しい存在として創り変えられた、

「新しい創造にされていることが重要なんですよ」

ということを言っている。

古いものを、私たちは生きている間はやはり引きずっています。引きずっているけれども、あちらの世界では、我々は全く新しい人間に創り変えられている。もう死ぬまでは、それは仕方がないですよ、古いものを引きずりながらね。けれども、あっちの世界では全く新しく我々は完全に十字架によって贖われてしまっている。それが

「根源現実ではもうちゃんと成っていますよ」

という小池辰雄の言葉がある。我々は死ぬまでは仕方がないんです、古いものを引きずりながら新しい世界に入っていく。パウロもやはり、

「古いものを引きずりながらでも、全く新しく人間は創り変えられたんですよ」

ということをガラテヤ書とかコリントの手紙の中で言っている。この

「全く新しい神の子とされた」

ということを、今のキリスト教会でもどこでもそれがちょっと曖昧になっているのではないかと思う。小池辰雄は十字架をしっかり受けとったので、もう新しく人間が創造されたということをはっきりと自覚している。パウロと同じように新しく自覚している。だから、さっきの讃美歌も、

「新天地の望みに生く、
主の光を四方（よも）に放つ」

と、新天新地ですごい望みの中で生きていくということを歌の中で言ってくれている。それがここで学んでいるところなんです。

《「人の子の栄光を受くべき時！」、何たる新事実の到来であろう。有史以来の新しき啓示の出来ごとである。》

ということを小池は心からそう思っていたから、こういう言葉を残してくれている。有史以前の古いものから新しいものに変わった、この「時」というのは非常に大切なことなんです。

●栄光を受くべきとき

私はなぜ、「伝道の書」を読んだかというと、第1章から「空の空」から始まるんです。第3章からは、

「1……**すべてのわざには時がある。2生るるに時があり、死ぬるに時があり」（伝道の書3・1～2）**

と。

「人は生まれる時がある、死ぬ時がある。食べる時があって食べない時がある」

とか、要するに、人間の営みの中で「時」ということを言っている。それはあくまでも人間の基準なんです。人間の基準で、我々は生まれる時があり、死ぬ時がある。これは普通平凡な、我々古い人間は当然そう思いますよ。伝道の書の中にはそういう無常観が流れている。そしてやはり、

「9**先にあったことは、また後にもある、先になされた事は、また後にもなされる。日の下には新しいものはない。10「見よ、これは新しいものだ」と言われるものがあるか、それはわれわれの前にもあった世々に、すでにあった**

ものである」（伝道1・9～10）

「太陽のもと新しいものは何もない。見よ、これこそ新しいと言っても、それはもう以前にもあったことだ。この地上には新しいものは全くない」

というようなことを言っている。だから、「伝道の書」というのは非常に無常観に満ちていると思っていると、とんでもないことに、最後にやはり神を讃美している。

「太陽のもと新しいものは何もない」

ということを言っている、これは神を知らない人たちにとってはやはりこういう感じなんです。現在でもこういう感じです、

「もう新しいことは何もないんだ」

と。ところがここでは、

「キリストが十字架にかかられて、全く新しいことがここで起こった」

ということを言っている。伝道の書は古い時代でしょ。旧約時代ですから、わからないですよ。

「新しいものは一切ないんだ」

ということを言っている。現在でも、キリストを信じない人にとってはやはり、伝道の書に書いてある通り、「新しいものはないんだ」と思っていると思う。ところが、イエスが来られて、時代をすっかり引っくり返してしまった。

「一人ひとりが変化するという全く新しい時代がきた」

ということです。

ここで小池が、「栄光を受くべきとき」ということを言っているけれども、これは十字架の問題だけではない。260頁に、

《しかし十字架の死の突破をするとその先に復活、昇天、聖霊降臨、最後の審判、そして再臨の栄光が待っている。》

という。

「栄光を受くべき時」

というこの「栄光」というのは、再臨までこういう言葉を残している。単に「栄光を受くべき時」と言って、十字架にかかるだけではない。もう復活も再臨も全部含めて栄光の始まりであるというようなことを言うわけです。「栄光を受くべき時」というその「栄光」というのは、その栄光自体が神の歴史の中の再臨まで含めて小池辰雄は思っていたということです。

イエスの言葉で、

「今、私は心が騒いでいる。私はなんと言おうか。父よ、この時から私をお救いください。しかし、このために、この時に至ったのです。父よ、み名の栄光をあらわしてください」（ヨハネ12・27～28）

小池は、

「ここの〝しかし〟は、とんでもない偉大なる〝しかし〟だ」

と言っている。

「今、私は心が騒いでいる。私はなんと言おうか。この時から私をお救いください」

と卒直に人たるの現実からの言を吐いた。けれどもイエスはそのあとで

「しかし、このために、この時に至ったのです。父よ、み名の栄光をあらわしてください」

と祈った。この偉大なる「しかし」で人間の現実を突破して、

「人間の現実を突破して」

の「現実」というのは、

「人間は死ぬものだ、もう罪に在って死んでいる」

という現実なんです。我々の毎日毎日でも、旧約もそうですし、キリストを知らない人たちも、私たちも、

「全部、死ななければならない、罪の中で生きなければならない」

という、それが人間の現実です。「その現実を突破して」と書いてある。「死を突破して」という意味です。

《死ななければならない人間の現実を突破するために十字架の贖罪死をした》

と小池は言う。

《「このため」即ち十字架の贖罪死のため、「この時」すなわち、いよいよ地上の生涯を終る時、独一の使命を果すべき時を迎えたのである。

この「独一の」という言葉の意味がちょっとわからないけれども、「唯一、一回切りの」という意味なのですかね。キリストだけしかできないような使命という意味なんだろうと思う。父の聖意を体現してこそはじめて「父の聖名の栄光があらわれる」わけであるので、このように祈った。》

「イエス・キリストが父の御意を行うためにこの時に至ったんだ」ということを言っている。それで

「我々は新しい人間に創り変えられて、新しい時代に生きていく」

ということで、

「もう何たる凄い時が来たんだ」

と言うわけです。人間の現実を突破したわけですから、本当に偉大なる時で、死から生命に移ったということです。人間が神と同じような質を変えられて、本当に神の子とされた。それを「死の突破」とか、「罪の突破」とかいうふうに言うわけです。

「全く次元の異なる時が、時代が来たんですよ」

ということを言っているのがこの一文だと思う。だから、「とんでもない時」ということです。

「人の子が栄光を受くべき期（とき）」のこの「期」は「カイロス」とかいうような言葉で言われているけれども、その「期、時」という言葉を繰り返しここで使っています。

「とんでもない時が顕れたんですよ」

ということです。

だから、我々キリスト者はそういう時をもって

「全く新しい人間として生きていこう」

というようなことを考えないといけない。もう忘れがちになってしまうんですね、我々は。しかし、こういう小池辰雄のここを読んでみると、

「ああ、本当に新しい事実が来たんだ」

ということを再認識することを学ぶことができると思う。私たちは忘れていますよ。だから、ここを読んでいくと、

「ああ、なるほどそうなんだ」

というがもう一度、再認識されていくということです。

●「一粒の麦」

それで、「新しい時が来た」ということで、小池辰雄の書物とはちょっと別に、私はプリントにこの「一粒の麦」という言葉の意味を書いてみた。

「一粒の麦」　　２０２４年12月　弘野慶次郎

「はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、そのままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」（ヨハネ伝12・24）

神の子イエスは、お言葉通りの一粒の麦となって十字架上の贖罪死を遂げてくださった‼……」

このことについて小池辰雄はあまり書いてくれてない。「時」とか、

「すっかり新時代が来た」

ということは強調しているけれども、イエスのこの言葉の内容についてはあまり書いてないので、私はちょっと私の思いで書いてみた。

イエス・キリストは当然、

「一粒の麦」

として死んでくださったでしょ。だから、物凄くみんなが、

「新時代が来て、一人ひとりが神の子とされた、大変なことだ」

ということです。それはイエスが本当に十字架で「一粒の麦」になって死んでくださったということがもちろんある。

けれども、この「一粒の麦」は我々一人ひとりも「一粒の麦」なんです。そして

「一粒の麦となって我々も死ななければならない」

ということが当然ここに出てくるわけです。ところが、イエスの死というのはとんでもない死でしょ、もう苦しみの中でね。我々の死というのは一体どういうものかということをちょっと考えてみた。

「我々もやはり死なないといけない」

ということは、このイエスの言葉から当然ですよ。我々も「一粒の麦」となって死ななければならない。ところが、「我々が死ぬ」というのはとんでもないことです。「我々が死ぬ」とは一体どういうことかということを、パウロがちょっと書いてくれている。それが有名なガラテヤ書2章20節です。

それをここに書いたんですけれども、ちょっとこれを読んでみます。

「上記聖句は

イエス・キリストが言われた「一粒の麦」のことですけれども。

我々も一人一人が「一粒の麦」となって「死ぬ」ことを願っておられることは明白ですが、それでは「死ぬ」とはどういうことでしょうか。

我々一人ひとりが死ぬとはどういうことでしょうかということです。その消息はパウロがガラテヤ書で語っています。

「キリストと共に十字架にかけられて、わたしは死んだ‼　生きているのは最早わたしではい、キリストがわたしの内に生きておられるのだ‼」

と、彼は十字架体験を熱く吐露しています。「自我という罪が十字架にかけられて雲散霧消（イザヤ44）し、キリストが内に住んで下った」のです。

これは十字架を体験したパウロの告白というか、十字架の有難さを吐露した言葉です。それが、「自分はもう死んでいるんだ。十字架によって死んでいるんだ」と、それが「一粒の麦が死ぬ」ということです。

「一粒の麦が死ぬ」ということは、十字架によって我々が同じように十字架されて死んでいる。だけれども、死んだままではない。その中に、キリストが私の中で生きておられる。

それが我々にとっては「死ぬ」ということなんです。

だから「死ぬ」とはキリストが我々の内で生きてくださる命の、歓びの事態なのです。」

と私は思う。パウロが十字架の体験をしたでしょ。そして、

「自分はもう十字架によって死んだ。ところが、自分は死んだけれども、自分の中にキリストが生きておられる」

と。これが「一粒の麦が死ぬ」ということ。我々の生活の中で「死ぬ」ということは、

「キリストが我々の中で生きる」

ということです。だから、それは歓びの世界です。「我々が死ぬ」ということは、十字架のような苦しみということではない。

「我々は毎日毎日生きて、歓びの世界の中で生きていく」

ということが、我々の「死ぬ」ということです。

「生命をもらっている」

ということが、我々にとっては「死ぬ」ということ。だから、「死ぬ」ということは暗いことではない。

キリストが十字架によって我々を贖ってくださって、パウロが言うように、

「もう自分は十字架されて死んでしまっている。キリストが我の中に生きている」

と、それが我々が「一粒の麦として死ぬ」という意味で、これは大変なことです。ところが、

「一粒の麦、死なずばそのままである」

というのを、キリスト教会の人がどれだけそう思っているか、私はちょっと疑問に思う。それをパウロがちゃんと言ってくれている。「一粒の麦が死ぬ」ということは、

「キリストと共に十字架されて、キリストが我々の中で生きている」

ということが、本当に「死ぬ」という意味です。だから、「死ぬ」ということはどういうことか、ここにちょっとイザヤ書を引用した。

「自我という罪が十字架にかけられて雲散霧消（イザヤ44）し、キリストが内に住んで下った。」

と。「雲散霧消」とイザヤ書に書いてある。雲のように本当に跡形もなく消えてしまっている。「死ぬ」ということは、

「我々の自我というものが跡形もなく消えてしまっている」

ということです。生きている間、我々が死ぬまでは、とんでもない古いものを引きずっています。引きずっていますけれども、

「もうあっちの世界では我々一人ひとりは本当に雲散霧消されて、全く古いものはなくなってしまっている」

という現実がある。それが「死ぬ」ということなんです、繰り返しますけれども。

「だから、「死ぬ」とはキリストが我々の内で生きてくださる命の、歓びの事態なのです。キリストが内に生きてくださることを、パウロは「新しく創造された（神と同質とされた）」と言い「それこそが重要なのだ」と述べています。とんでもない恵みです。それをこそイエスが願われていたこと、だと思うのです。」

私は、これはとんでもない恵みだと思う。自分は何もしてませんよ。自分は何もしてません、キリストにすがるだけなんです。キリストを信じるだけ。それだけで我々は新しく創造されてしまっている。努力して神さまの所へ行ったのではない。神さまのほうから我々の所

へ近づいてきてもらって、新しく創造のわざを我々の中でしてくださった。
それをパウロがダマスコ途上の体験でしたでしょ。

「上から光の霊撃をされた」

と小池は言います。本当にパウロの体験を通じて「我々が新しい人間にされたんだ」ということを言っている。新しく創造する。これは「神と同質とされた」という意味ですよ。

「本当に神と同質にされた。これこそが重要で、それが新しい人間ですよ」

ということを言ってくれている。それで、

「パウロは、新しく創造された御霊の結ぶ実は、

死んだ者が、キリストが我々に生きてくだったら、

愛、歓び、平和・平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制だと列挙しました。」

こういうことが我々のうちに起こるんです。これはパウロが体験した思いです。パウロが十字架によって死んで、自分が新しく創造された。その時に、「愛、歓び、平和・平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制」、こういうものがパウロの中に顕れた。だから、これを書いてくれている。

決して、我々が「これをしないといけない」とかということではない。「喜べ」と言われたって、喜べませんでしょ。これは自(おの)ずから、勝手に神さまが、キリストが我々の中にきてくださったら、愛とか歓びとか平安とかが満ちてくるわけです。だから、

「自分がしようとしなくても、寛容であり、親切になっていくんですよ」

ということを言っている。決して「自分の力で親切にしましょう」とか、そういうことではなく、

「自ずからこういう歓びがわいて、愛の感情がわいてきて、この柔和とか、節制とか、そういうものが起こってくるんですよ」

ということを言ってくれている。これもやはりガラテヤ書に書いてある。ガラテヤ書でパウロが、

「福音を受けとってくださいよ」

と言うわけです。

「十字架で我々は死んだ。そして、キリストがうちにきてくださった。そうすると、自ずとその御霊が我々の中に入ってきて、愛も歓びも平安が我々に満ちてくる。自ずから寛容もついてきますし、親切にもしましょうとかという思いが自然にわいてくる」

ということをパウロが言ってくれている。

コリント第一の手紙の13章にも、愛のことを言っている。ここは有名ですね。

「[4]**愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。**
[5]**礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。**[6]**不義を**

喜ばず、真実を喜ぶ。7すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」（コリントⅠ13・4～7）

これはパウロの体験を書いている。パウロは本当に十字架によって死んだから、こういう思いが自ずから出てきているということを言っている。

我々はできない時もありますよ、古いものを引きずっているから。仕方がないですよ。けれども、パウロがこれだけ言っていることをやはり学ぶことによって、我々も

「あっ、もっと本当にキリストの御霊をいただかないといけないんだな。本当に死なないといけないんだな」

ということがわかってくると思うんですよ。それで、これは重要なことですけれども、

「**一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。**」

という言葉があるでしょ。

「我々が十字架によって贖われて我々が死ななければ、ただの人になってしまう」ということを言っていると私は思う。それをここに書きました。

「また「死ななければ、そのままである」とは、折角キリストのそば近くまで来ていても、「死んで内にキリストが生きておられない」なら、パウロの言う「ただの人」のままで終わってしまう。」

この「ただの人」というのはコリントの手紙の中に出てくる。コリントの教会というのは、

「私はパウロにつく。私はアポロにつく」

とか、みんな勝手なことを言うわけです。そんなことを言っているのは仲間割れみたいなものでしょ。

「そういう仲間割れをしたらだめですよ、重大なのはキリストですよ」

と言っているわけです。だから、いつまでも教会で権力争いをしたりして、

「私はパウロがいいんだ、私はアポロがいいんだ」

とか、そういうセクト的な狭い心でいるというのは、

「本当にあなたは十字架によって死んでいないのではないですか。ただの人、旧来の人に過ぎないのではないですか」

ということを言っている。

「ただの人のままで終わってしまうよ」

ということを言っている。だから、キリスト教の中でキリストのみそばに行っても、

「本当に十字架によって贖罪されて、我々が死んで、キリストがうちに生きてくださらなかったら、そのままでもうただの人に終わってしまうよ」

ということをパウロが教えてくれている。パウロはもういろんなところで怒っていますよ。ガラテヤの手紙の中でも怒っているし、コリントの手紙の中でも怒っている。

「福音というのはたった一つしかない。キリスト以外に問題にしなくていい。いつ

までたっても、ただの人に終わってしまったら、困りますよ」
というのがパウロの願いです。その願いというのはもちろんキリストの願い、神さまの願いです。パウロが代表してそれを言ってくれているだけです。だから、

「**一粒の麦が地に落ちて死ななければそのままである**」

と。本当に「そのまま朽ちて死んでしまうんですよ」というのが、この「一粒の麦」の中の大事なところです。これが、

「イエスのこの一節に神の無念が見えるような気がします。」

私はそう思うんですよ、この言葉の中に。普通、

「**地に落ちて死ななければそのままである**」

というのは、読み過ごしてしまう。「一粒の麦は死ななければならない」とか言うと、「ああ、死ななければならないのかな」とか思ってしまうけれども、「死ぬ」ということは、さっきも言いましたように、

「キリストがうちに生きてくださる」

ということ。そして、「歓びがわいてくる」ということが「信ずる」ということです。それが生命の歓びなんです。だから、

「そのままで在ってもらっては困るよ。私（キリスト）が十字架にかかって死んで、私があなたの中で生きてほしい」

というのが神さまの願い、イエスの願いなんです。それを私はこの「一粒の麦」というところで書いた。

それが、さっきも言いましたように、この言葉の内容については小池はあまり書いてくれていないので、これを私は補足という意味で書いた。本当に凄いことをなさったんですよ、イエスというのは。

「神さまの御意を体現されたのがイエスである」

というようなことを言ってます。

我々はやはり、「死ぬ」ということが物凄く重要なことなんです。

「キリストによって私は死んだ。私がもう本当に、イエスが私の中に生きておられて、キリストが私の中に生きておられて、生き生きとして生きてほしい」

これが本当に神さまの願いですよ。「我々はこうしなければならない」というのではなく、神さまの願いがキリストに伝わって、キリストが十字架の贖いしてくださった。

「あなた方は本当に毎日毎日の生活の中で歓んで生きてくださいよ」

というのが「一粒の麦、死ななければ」という意味です。決してこれは暗い意味ではない、「私たちが死ぬ」ということは。

「この地上でも、新しく新天新地がくる時にも、あなた方はキリストと共に一緒に生命の歓びの世界の中に生きてほしい」

というのが神の願いなんです。それ以外には願いはないですよ、神さまだから。親は子どもが歓んで生きていたら、嬉しいでしょ。それと同じですよ。神さまが我々一人ひとりに対して、

「本当に神さまの質となって、歓んで生きてくださいよ」

というのがこの「一粒の麦、死ななければ」ということです。

「死んでほしい」

というのが神さまの願いで、それを体現してくれたのがパウロです。パウロがきちっとはつきりと、

「私はもう死んでいる。キリストが私の中に生きている」

ということを言ってくれている。だから、

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、そのままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」（ヨハネ伝12・24）

ということ。我々も歓んで生きていたら、その周りの者も歓びますよ。暗い顔をしていたら、周りも暗くなるでしょ。

「何であなたはそんなに歓んで生きていられるか？」

というと、パウロが言うように、

「私たちが死んで、神さまが私たちの中に生きてくださっているから、初めて私たちは歓んで生きることができるんです」

と。これが本当に神さまの願いだから、この神さまの願いを私たちは無にしてはいけない。

「もっともっと、歓べ歓べ！」

とパウロが言っているでしょ。それと同じですよ。

「私たちに歓んで生きてほしい」

というのが本当の神さまの願いなんです。

キリスト教というのは何か難しいことばっかり言っているけれども、そんな難しいことではない。一人ひとりが――これは一人ひとりですよ、集団ではない。一人ひとりを神さまは創られたでしょ――一人ひとりが本当に神さまの質になって生きてほしいというのが神さまの願いです。決して、集団ではない。一人ひとりが、神さまの願いを私たちが受けとって、手放しで歓んで生きればいい。何の難しいこともない。それが「一粒の麦」なんです。

そういうことを小池はもう知っていたですよ、ここには書いてないけれども。奥田先生も知っておられるから、奥田先生もすごく講演なんかをなされるでしょ。それはみんな同じ願いです。本当に歓んで神を讃美している。小池辰雄は、我々は何のために創られたかというと、

「神さまを讃美するために創られた」

という言い方をしている。

「我々の存在は神さまを讃美するために生きている。もうそれ以外にない」と言う。

しかし、小池の書いているのは難しいですよ、表現が。難しいけれども、根本はそうなんです。小池辰雄はパウロと同じように、歓んで生きている。讃美歌にも、そういうのが出てきている。讃美歌Ａ18「聖書の扉に」も、

「十字架されればみ霊臨み
み言息吹くよあなうれしや
我らはいのちに満ちあふれて
み名をたたえつ主にぞ生きる」

と書いてある。小池辰雄はこういう思いで生きていたと思う。

「我らはキリストの生命に、神さまの生命に満ちあふれて、聖名を讃えつつ主にぞ生きる。我々が生存して生きていくというのは、本当に聖名を讃えること、神さまの歓びの生命に我々は生きて、本当に神さまを讃える。それが我々の使命なんだ」

ということを小池は言うから、こういう讃美歌を歌う時に、小池辰雄が本当にどういう生き方をしていたかを思う。欠点だらけですよ、小池辰雄も。欠点だらけでもいいんですよ。欠点だらけでも、思いとしてはやはり、

「我らはいのちに満ちあふれて
み名をたたえつ主にぞ生きる」

というふうに、小池辰雄は生きたと思う。だから、今日、この讃美歌を歌ったということは偶然ではなかったと思う。

●まことの神にしてまことの人

これが私の言いたいことです。それから、今日学んだところで、ギリシア人、異邦人に宣言されたことが書いてあります。

《異邦人が数名やって来て、イエスに会いたいとねがったことはふしぎである。「ふしぎである」と書いてある。

いよいよ異邦人に福音が伝えられるさきがけとなったといえよう。》

これはヨハネが

「ギリシア人が来た」

ということをわざわざ書いている。ユダヤ人だけに言ってない。これは本当にふしぎですよ。ギリシア人とか異邦人が来て初めてこの「一粒の麦」のことを語られた。これは偶然ではない。やはり、神さまが異邦人に対しても、

「これはユダヤ人だけではない。全世界への宣言ですよ」

というようなことで、偶然にギリシア人が来たのではない。

「ふしぎである」

と書いてありますように、この時を通じて全世界に広がるさきがけとなった。これが異邦人が来た時に語られた物凄く重要な言葉です。

「はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、そのままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」（ヨハネ伝12・24）

「私はそのために十字架に付けられるんだ」

ということを、弟子だけでなくて異邦人にも言ったということは偶然ではない。本当に全世界に伝えるさきがけとなった、その一言だと私は思う。小池は「それがふしぎである」と書いていますけれども、全世界に広がるためのさきがけであったので、この時に語られたのだろうと思う。

それからここでちょっと小池が書いてくれているのは、

「まことの神にしてまことの人」

ということ。イエスというのは人間の姿を現してこられた。それで神の人なんです。ちょっと見は人間です。けれども、神を現しているという、とんでもない人なんです。だからここで、

《これがいわゆる vere Deus vere homo（まことの神にしてまことの人）たる所以である。》

と。これはとんでもない有難さです。神は見えないでしょ。見えないけれども、具体的な姿をとってイエスが来られたということは、私らにとっては物凄い有り難いこと。キリストという神の子が来られて十字架にかかられたということは、物凄い有り難いことです。

「神さまが人間の姿をとる」

というのは躓きですよ。何で神さまみたいな尊い方が、人間のこの哀れな姿になってこの地上に来られたかというのは本当に躓きです。十字架の死なんて本当に惨憺たるものでしょ。全然惨めな死ですよ。けれども、神さまは放っておかない。三日目に復活されたでしょ。復活されたことによって、本当にこの方が神の子であるということの証明になった。これはとんでもない有難さなんですよ。それが

「まことの神にしてまことの人たる所以である」

ということです。

《神性のキリストと人間性のイエスとがふしぎな一体をなしている。》

と小池辰雄は書いてくれているけれども、こんな有り難いことはない。

〔註：４５１年、教会はカルケドン公会議を招集し、いくつかの異端と戦った。その中でも最も重要だった異端がキリスト単性論で、イエスが神性と人性の二つの本性を持っていたのではなく、一つの本性しか持っていなかったことを主張した。その一つの本性とは、完全なる神性でも、完全なる人性でもないとされている。それは、見る人によって、神格化された人性にも、人格化された神性にもなりうるものであった。これに対抗して、カルケドン公会

議は、キリストは一つの人格の中に二つの本性を持っておられる存在、「vere homo, vere Deus」、すなわち「真に人であり、真に神である」ことを宣言した。」

人の形をとってこの地上に来られて、我々のために贖いのわざをなさって、そして、復活の生命までもらった。

「キリストは死に放しではない。復活せざるを得ない」

ということを小池は言いますけれども、あの復活がなかったら、我々は本当に生命はない。あの復活によって初めて我々は神さまの生命が本当に我々の中にあるということがわかるわけです。だから、十字架だけではない。十字架と復活があって初めてキリスト教というのは成り立っているということです。

●十字架から再臨の栄光

この栄光というのが、何遍も繰り返しますように、

《しかし十字架の死の突破をするとその先に復活、昇天、聖霊降臨、最後の審判、そして再臨の栄光が待っている。》

我々は見てませんよ、「再臨」のことなんかわかりません。「復活」も我々はまだ体験もしてません。けれども、

「キリストが復活された」

ということでパウロは、

「我々はもう復活の生命はもらっているんだ」

ということをはっきりと言ってます。パウロだって「復活の生命」までまだ行ってませんよ。まだ新天新地が来てないから、復活とはどんなものかわかりませんけれども。パウロは復活を望み望んでいる。

「死んでも死なない生命」

ということをキリストが言っているでしょ。それを我々はもう約束されたんだと、それが「栄光」なんですね。だから、

「人の子が栄光を受ける時がきた」

という、その「栄光」の中には、十字架を突破して、復活も入るし、昇天、聖霊降臨、最後の審判、再臨の栄光、そこまでが入っている。「栄光を受ける時」というのはそこまでが入っている。

この「まことの神にしてまことの人」ということを、小池辰雄はローマ書8章をもって引用している。261頁のまんなか辺です。

《それはパウロがいっている通り、「聖子（みこ）は罪の肉のさまで罪のために遣わされた」からである（ロマ8・3参照）。》

それで、ローマ書8章の1節から3節を見てみましょう。

「[1]**従って、今や、**
始めに「今や」と書いてある。「もう時代が変化した今、今こそ」とパウロは言う。
キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。
この1節は凄いですよ。
「我々は今や、本当に今、イエス・キリストと一緒に信じている者は罪に定められることはない。神さまから断罪されることはありませんよ」
ということを先ず8章1節で言っている。もうとんでもないことですよ。我々は罪だらけの存在、罪だらけの人間ですけれども、キリストに在っては神さまから断罪されることはない。再臨の時がきて、
「審判の時がきても、我々はキリストによって、地獄に落とされることはない」
ということを言うわけです。罪に定められることはない。永遠の罪の地獄に落ちることは絶対にありえないと、パウロは言う。
「[1]**今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。**
断罪されることは決してありませんと。この1節も凄いですよね。
[2]**キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。**
断罪されることもないし、あなた方は本当に罪、自我から完全に解放されているんですよと。
[3]**肉の弱さのために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです。つまり、罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです。**」
これが「人間にして神の子である」ということをはっきり言っているところです。イエスという、見た目は本当にしょぼくれているところもある。十字架のイエスなんていうのは、見る影もないような人間でしょ。そういうふうな、
「罪深い肉と同じ姿で我々の所に来てくださって、その肉によって罪を滅ぼしてくださった。自我から解放してくださった。だから、もう罪に定められることは一切ないんですよ」
ということを、この8章1節で言っている。これを小池辰雄はここでちょっと引用してくれているのは、
《我々一人一人のための死である。イエスは地上では全く一個の人間であった。それはパウロがいっている通り、「聖子（みこ）は罪の肉のさまで罪のために遣わされた」からである（ロマ8・3参照）。》
ということ。1節から3節のところを読んでいくと、本当にもう断罪されることはないし、
「イエスによって自我とか罪から解放されて、断罪されることはない。肉の弱さで

来て、我々のために死んでくださったんだ」
というのが、この8章1節から3節です。我々はここで神さまを讃美する以外にはないんですよ。それ以外にはない。研究とか、勉強とか、そういう難しいことは考える必要はない。
「本当にもう幼児（おさなご）のようにキリストに従っていけば、それで十分だ」
というようなことを私は思う。

●我々一人一人のこと

≪一粒の麦、地に落ちて死なずば

一粒の麦が石の上に落ちたら、本当に枯死してしまう。いわゆる犬死的な死と同じである。しかし一粒の麦が地に落ちると、殻を破って根が生えて、芽を吹き出す。麦の殻が破れることを「死ぬ」とイエスが表現したのには実存的な意味がある。そうすると一粒の麦から夥（おびただ）しい新麦がやがて実るわけである。人間の場合は存在を投げ出したら死である。それで「地に落ちて死なずば」と言ったわけである。聖書の神話的表現や譬話（たとえばなし）的表現が啓示的及び実存的な内実に関わることは、この場合もそうである。
「一粒の麦」とは我々一人一人のこと。「地に落ちて死なずば」は、単なる死をいっているのではない。死をして死たらしめるものは、日常の生活ぶりが心一杯、全存在的なものである。そういった生きざまを生きた人の死はいたずらには終らない。何らかの果を結んでゆく。≫

ここに「我々一人一人のこと」と書いてある。この「一人ひとり」というのが大切なんです。兄弟であっても、親子であっても、夫婦であっても、「一人ひとり」なんです。一人ひとりが神さまに行かないといけないので、
「日常の生活ぶりが心一杯、全存在的なものである。」
と書いてある。これがパウロの言う
「我は十字架によって死んで、キリストが我々のうちに生きてくださった」
という意味ですよ。
「そういった生きざまを生きた人の死はいたずらには終らない。何らかの果を結んでゆく。」
と。これは
「我々一人ひとりが何らかの実を結ぶ存在とされてしまった」
ということです。十字架によって我々が死んで、キリストが私たちの中に生きてくださったので、我々が死んでうちにキリストが生きてくださったら、本当に何らかの実を結んでいくんです。そういう生き方をしていると、何らかの実を結んでいくということが、ここで小池が書いてくれている。何回も言いますように、本当に
「我々が死ぬ」
ということは

「キリストに生きる」

ということなんです。歓びのうちに生きるということで、初めて何らかの実を結んでいく。そういうことを小池がここで結論として書いてくれていることになります。

この「一粒の麦」というのはやはり福音書の中でも中心的なところです。キリストが十字架によって贖いの死を遂げてくださったということ。そのあとの復活から再臨まですべてが含まれている。

「その栄光の時が来たんだ」

というようなことで、この「一粒の麦」のところでは、学ぶべきものが非常に多いなと思って、私は読ませていただきました。

小池辰雄はやはり表現が難しいから、噛み砕いて読んで、こういうふうに歓んで生きないと、小池辰雄の文章に振り回されんようにしないといけない。やはり明治の人だからしょうがないですね。「突破」とか、

「体当たりせよ」

とかよく言うでしょ。確かに「突破」ですよね。

「人間が死んで復活する」

なんていうのは突破中の突破です、もうとんでもないことです。それを表現として「突破」と言わざるを得ないんですね、小池辰雄は。

「死んでも死なない生命をもらう」

なんていうのは言葉で表現できないですよ。それから、

「今、私は心が騒いでいる。私はなんと言おうか。父よ、この時から私をお救いください。」（ヨハネ12・27）

こういうイエスのお心持は、想像さえできないと思う。この「心が騒いでいる」とか、「キリストの心が騒ぐ」なんて、想像さえできない。物凄い高みの次元で「心が騒いでいる」と仰ったんでしょうね。我々は想像できませんよ、

「今、私は心が騒いでいる。私はなんと言おうか。父よ、この時から私をお救いください。しかし、このために、この時に至ったのです。」（ヨハネ12・27～28）

この言葉のイエスの思いなんて、我々は想像さえできない。率直に「心が騒いでいる」と仰っている。十字架の前には血の汗を流すような祈りをされているでしょ。あの思いなんて、我々にはとんでもない、わかりません。あのキリストの苦しみなんて、とても我々には想像できない。ただ、そういうことをやってくださった、そのところに我々は戴くだけですよ。だから、パウロが

「十字架以外に誇るものがあってはならない」

と言っている。本当にパウロの思いですよ。

「自分の誇りなんて本当に何でもない。十字架以外に誇るものはあってはならない」

と断言している。それほど十字架というのは凄い。キリストの為されたことは凄いんです。キリストの苦しみもとても想像できない。凄いことを為さってくださったというのがパウロの思いでもあったと思います。

私はあまりしゃべり方が上手でないからあれなんですけれども、思いだけでも伝えられたらと思っています。今日はここで終わりたいと思います。

……

皆さんのお話を聞かせていただいて、ありがとうございました。私は本当に、神さまを歓んで讃美して生きていけることができたら、私はどこへでも、そういうように歓んでいる人の所に行きたくてしょうがないんです。ここだけではなくて、大阪の「ビップ」という――あれは全国的な組織ですかね――そういう所にクリスチャンが集まってきて、音楽を聞いたり、キリスト教のお話を聞いたりする。そういう所に行っても歓んでいる人がおられる。他の教会に行っても歓んでいる人がおられる。ひとまとめに「教会はどうだ」とか、そんなのではない。その中に一人ひとりがおられて、そういう人が歓んでいるのに出会うと、私は本当に嬉しくなる。キリストを歓んでいるという姿が一番美しいと思っている。

小池辰雄の生前を見ていると、小池辰雄は本当に子どもみたいなところがありましたよね、やはり。幼児の姿で小池辰雄は生きておられたのだ思う。ところが、この残された文章は難しいから、そういうのが顧みられないのですが。実際に小池辰雄を知っていると、欠点だらけですが、けれども幼児のような感じの方でした。それがやはり凄く私は学ぶところが多いと思っています。

こうして、私は皆さんと共に讃美できることが嬉しいことです。どこへ行ってもそうです。垣根というのがないんですよ、キリストに在ったら、どこの宗教であっても本当に垣根がなくなります。そういうふうな垣根のないのが天国だと私は思っている。

わざわざ奈良からここへ来ていますけれども、やはり私がキリストからもらったこの歓びが、みんなに少しでもわかっていただけたら、その歓びに生きていただいたらと、私の思いはそれしかない。そういうことで、ここまで来ておりますけれども、そういう思いだけで私は語っています。私は研究者でも何でもないし、私は本当に何もわからないんですよ――何もわからないというか――勉強したことがないから、ただ導かれるままにというか、本当に神さまからもらった歓びを伝えられたら、それだけで私は十分だと思ってここへ来ています。

どうもありがとうございました。